

旧笠井街道案内資料

「馬込から笠井・鹿島へ」



笠井町 笠井観音（福来寺）

○ 笠井街道について

現在の「県道45号天竜浜松線」は通称「笠井街道」と言われている。浜松市宮竹交差点から市野、笠井を通り、中瀬を通過して鹿島橋交差点に至る道である。その街道の中ほどにある笠井村は江戸時代から市が開かれ、湖北の「金指市」、北遠の「二俣市」と共に遠州の流通経済の拠点として栄えていた。幕末から明治にかけては繊維製品の取引が大きなウエートを占めた。明治23年には笠井の南に遠陽市場が作られ、浜松や各地の商人が集まり賑わった。

江戸時代の「旧笠井街道」と思われる道筋は、延宝8年（1680）頃に作られた青山家御領分絵図によると、浜松宿馬込橋の東から東海道と分かれ、蒲神明宮の北西を通り西塚村を経て、天王田面を曲折し天王村から市野宿に至り、安間川沿いに北上して上石田村を通り、恒武村の西を通過して笠井村に至っている。絵図では、さらに北上し、東美蘭村、西美蘭村を通り、本沢村に至る道筋が書かれている。その北は天竜川の「川原」と書かれ、道筋は書かれていない。延宝3年には小天竜を締め切る彦助堤が築かれている。流れが変わり「川原」は大水の時には川となり、中瀬村と分断されてしまい、明白な道が書かれなかったのではないかとと思われる。

その後、南鹿島から大平への堤が作られ、さらに明治初めの長堤普請によって、西の天竜川が堰き止められて、川原跡が畑に開墾されたり、中瀬村を通じて鹿島に至る道が作られたりしたのではないかとと思われる。明治23年の地図では、はっきりとその道筋が記されている。

明治半ばになると、乗合馬車も盛んになり、荷物も馬車や大八車で運ぶようになると、旧笠井街道も改修されたり、宮竹を通る別の新道などが作られたりして、明治33年には宮竹・笠井間が竣工し、明治39年には笠井・二俣間が竣工して新しい笠井街道が完成している（大正8年の地図）。そして、大正8年に浜松・笠井間が県道になり、大正14年に笠井・鹿島間が県道となった。

大正12年、浜松・笠井間に、昭和初めには浜松・笠井・鹿島間に、笠井自動車商会が乗合自動車の運行を始めた。昭和30年には、市野宿の姫街道を通らず、北へぬける道が付け替えられている。

○ 地図について

本案内資料では、大日本帝国陸地測量部が測図した明治23年の地図をもとに、旧笠井街道の道筋を現在の地図上に表している。現在の使用地図は、「国土地理院の電子地形図（タイル）」を活用した。

—— 旧笠井街道 旧笠井街道（消滅・通行不可）
—— 笠井街道 ——— 迂回路 - - - - - 堤跡

○ 参考文献

- | | |
|-------------------|---------------|
| ・浜北市史通史 上巻・下巻 | 浜北市 |
| ・浜北市史「浜北と天竜川」 | 浜北市 |
| ・浜北市史資料 近世 | 浜北市 |
| ・郷土浜北のあゆみ | 浜北市 |
| ・浜松市史 二・三 | 浜松市 |
| ・路傍の神仏と道標 | 浜松市浜北郷土史部 |
| ・養蚕と中瀬 伎倍12号 | 浜名高等学校史学部 |
| ・物語 中瀬村誌 | 橋本義栄 |
| ・中瀬村と「県蚕糸」半世紀のあゆみ | 河合梅彦 |
| ・ふる里ながかみ | 浜松市立長上公民館 |
| ・遠州伝説集 続・続々 | 御手洗 清 |
| ・わが町文化誌「笠井」 | 浜松市立笠井公民館 |
| ・はままつ歴史発見 | 神谷昌志 |
| ・川と生活 水防と利水の歴史 | 浜松市博物館 |
| ・龍燈・秋葉山常夜灯 | 浜北市教育委員会 |
| ・浜松市の石造文化財所在目録 | 浜松市石造文化財調査会 |
| ・遠州地方の交通発達史 | 遠州鉄道株式会社 |
| ・ふるさと歴史散歩 第一集 | 田辺寛司 |
| ・愛称標識の由来 長上の歴史 | 長上地区愛称標識設置委員会 |
| ・長上風物詩 | 長上すみれ婦人学級編 |
| ・ふるさと蒲 愛称標識の由来 | 蒲地区愛称標識設置委員会 |
| ・馬込橋の東から出ていた旧笠井街道 | 東海展望 神谷昌志 |
| ・愛称標識ガイドマップ 長上 | 浜松市 |
| ・わが町文化誌「袖紫ヶ森」 | 浜松市立蒲公民館 |
| ・浜松歴史散歩 | 神谷昌志 |
| ・ふるさとのあゆみ 愛称標識 | 東地区愛称標識設置委員会 |
| ・奥山半僧坊道案内資料 I・II | 太田隆雄 |
| ・秋葉街道案内資料 I | 太田隆雄 |
| ・姫街道案内資料 | 太田隆雄 |

作 成 平成28年5月20日
 浜松市浜北区寺島816 太田隆雄
 TEL・FAX： 053-587-3063
 Email： wbs15437@mail.wbs.ne.jp

＜旧笠井街道の道筋＞

—— 旧笠井街道（このページの地図は消滅した道も実線で示しています）

1

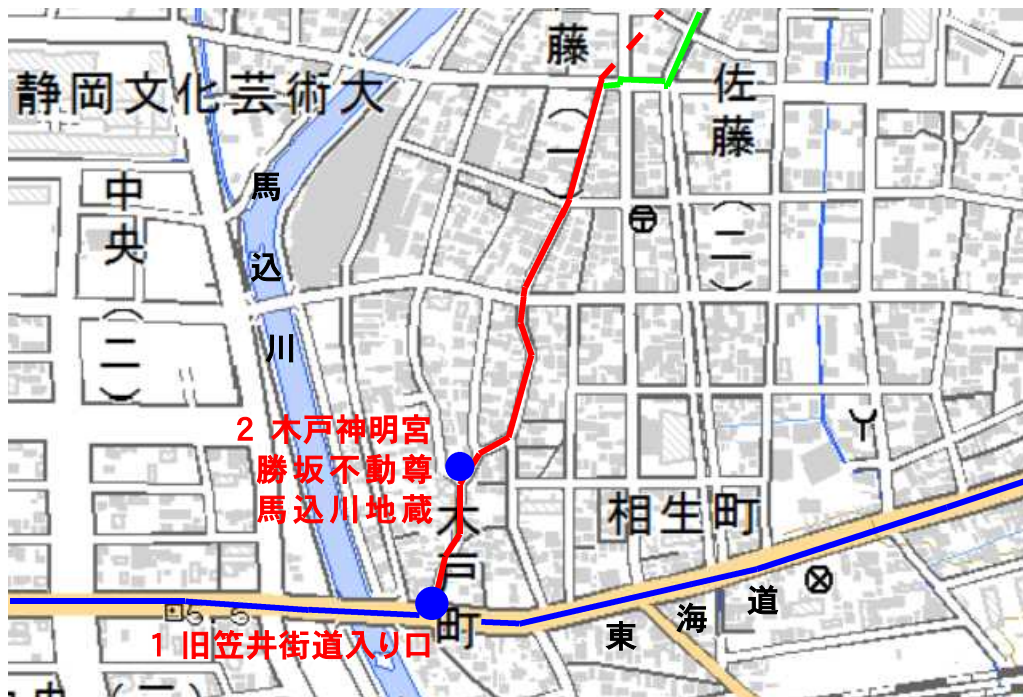


2



3





入り口から200mほど、蔵が建ち旧街道の面影のある細道が続く。

- 1 旧笠井街道入り口**
 木戸町の名は、東海道の馬込橋の東に浜松城下の外木戸があったことから名付けられた。
 馬込橋の東の金物店とめがね店の間に旧笠井街道の入り口がある。「旧笠井街道入口」の標柱が建てられている



2 木戸神明宮・勝坂不動尊・馬込川地蔵

・木戸神明宮

説明板によると、木戸町は、もと八幡宮の氏子であったが、割当金の負担が重かったので、八幡宮の氏子をぬけた。そこで昭和28年10月14日、伊勢皇大神宮より天照大御神を迎え、町内の守り神として祀っているという。

・勝坂不動尊

勝坂不動尊（戒光院）は秋葉寺の奥の院と称されている。木戸町には大正10年ころ、木戸町の有力者によって、春野町龍頭山戒光院より勝坂荒澤不動明王の御分尊を受け、町内安全を祈って祀られている。第二次世界大戦の折には、若者たちが武運長久を祈って戦地に赴いた。

・馬込川地蔵尊

江戸時代、馬込川に身投げする人が多く、川の両側の有志が相談の上、これらの霊を供養するため、幕末のころ、馬込橋の東南側の土手に等身大の石造りの地蔵尊を建立した。「町内安全、諸人快樂、水死人成仏」と刻まれていた。ところが、その後、勤王の志士たちが目障りとして馬込川に投げ込んでしまったという。維新を迎え、地蔵尊を再建して祀り、地蔵盆には人々で賑わった。その後、川の西に移転したが、再び平成10年、この地に帰った。



六間通りから用水に沿って進むと、うめ橋、たけ橋、まつ橋がある。そして、まつ橋を渡ってから再び用水に沿って進むと、蒲神明宮の西側に至る。

街道は柳通りを斜めに横切って進む。



3 蒲神明宮

一説に大同元年（807）創立という。内宮に天照大御神，外宮に豊受比売神を祀る。

蒲氏の祖，藤原静並は越後の人で，平安時代の初め，遠江大掾としてこの地へ移り住み，開拓を始めた。開発した土地五百五十町歩を伊勢大神宮に寄進し，遠江蒲御厨主と称し，伊勢大神宮を勧請，神明宮を建てたと伝えられる。そして蒲氏は荘官として御厨の経営にあたり，鎌倉時代から代々神職を兼務した。明治維新まで二十四郷四十二か村が神明宮の氏子であった。

藤原静並が蒲の地へ移り住んだいきさつの伝説から，境内地を「^{そでしがもり}袖紫ヶ森」と呼んでいる。また，蒲神明宮は俗称として「ごしん様」とも呼ばれている。



・蒲桜の伝説

「蒲冠者 源範頼」は源義朝の六男として蒲御厨で生まれたとされる。平治の乱で父義朝が討たれたが，範頼は蒲の地で密かに育てられた。頼朝の平家打倒の挙兵に応じ，関東に向かう時，大好きだった桜の苗木を持参して，自分の居城に植えた。石戸の蒲桜といい，今も埼玉県北本市にある（樹齢八百年）。

やがて総大将として上洛の途中，三重県鈴鹿市の石薬師に戦勝祈願した時，蒲桜でこしらえた鞭を逆さに立て「もしも戦さに勝ったなら，きっと生きよ」と言って大地に突き挿した。幸い源氏の大勝利にこの蒲桜が芽を吹いて今に至った。これを石薬師の蒲桜という。

その後，範頼は頼朝に逆心ありと疑われ，伊豆に流されたという。範頼の最後についてはいろいろな説がある。供養塔の一つが飯田町の龍泉寺にもある。



・むいの灯籠

拝殿前に一対の石灯籠があり，向かって右側の灯籠には，遠州織物の生みの親，育ての親とも言える「小山みゑ」の功績をたたえた文が刻まれている。

小山みゑ（戸籍名は，みい）は，文政4年（1821）長上郡都盛村（芳川町）寺田惣七の長女として生まれた。若い頃から機織りの腕前が高く，機織りの改良に力を注ぎ，農家の副業に過ぎなかった機織り仕事を，独立した事業にまで発展させた。亡くなるまで製造・販売に力を尽くし，遠州織物を全国に名の通った地場産業までに育て上げた。

地元の織物業者で作った永隆社という組合によって，明治33年遷宮を期に灯籠が建てられた。

・道標

神立町の蒲神明宮の横には，昭和30年頃まで「左笠井二俣街道」「直笠井二俣街道」と刻まれた高さ1.5mの角柱の道標が建てられていたが，現在は不明となっている。（「はままつ歴史発見」神谷昌志著（写真あり））



馬込川は改修されるまでは、現在の船越公園の北から東を回り蒲神明宮の西側まで大きく湾曲し、「ごしん淵」と呼ばれていた。現在はわずかに用水路として整備されている。ごしん淵の東側は、水田や太藪田で豪雨があると水没してしまった。

旧笠井街道である堤通りは、馬込川の堤防として水が東に流れ出るのを防いでいた。現在は水田は埋めてられ、宅地となってしまうている。



4 いぼ神様 (宇津木様)

長久寺境内に、いぼ神様祀られている。

昔、寒い夜一人の行者が西塚の地にたどり着いた。醜いいぼだらけのため、泊めてくれる家もなく、仕方なく近くに捨ててあったもみ殻の上に疲れた身を横たえたが、「もう一升もみ殻があったら暖かく眠ることができるだろう」と悲しんで、余りの寒さに亡くなってしまった。

翌朝村人が見に行くと、そのつえ

には「私を祀ってくれるなら願いをかなえよう。代わりにいぼが治ったら一升のもみ殻を供えてほしい。」と書いてあり、村人たちはつえを立てて手厚く葬った。やがてそのつえから芽が出て、うつぎの木になった。その木にちなみ、宇津木様として厚く信仰されている。

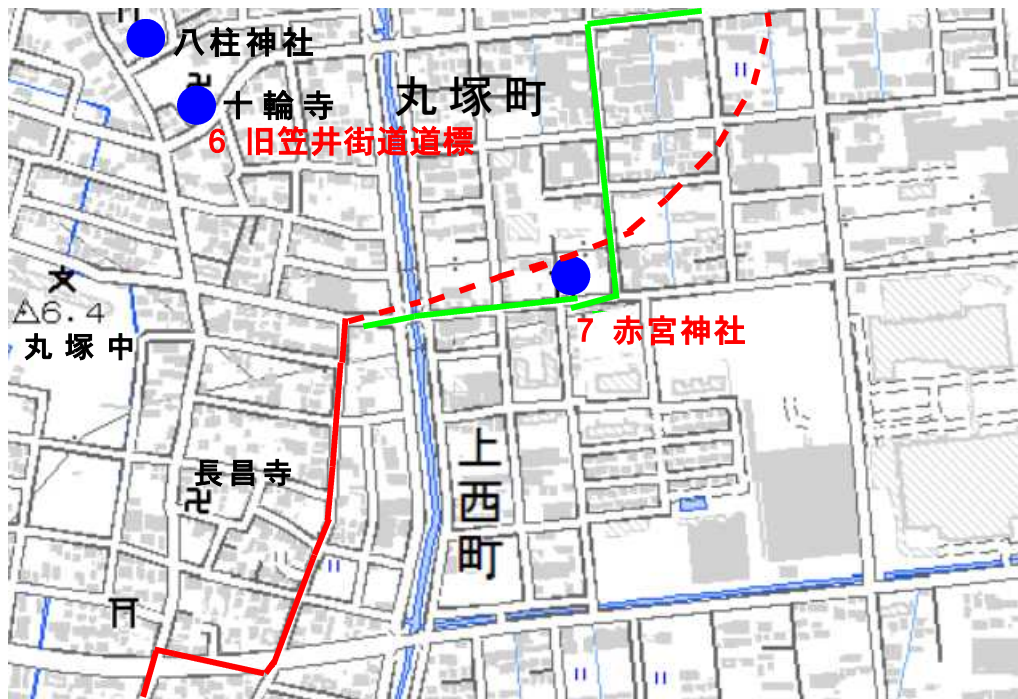
5 富士神社

祭神は木之花咲耶姫命で、南北朝時代の創建とも言われている。駿河の浅間神社から勧請したもので、明治24年上西村の氏神とされた。祭神は、子宝を授ける神として信仰を集めている。八王子社と稲荷社が合祀されている。

境内に秋葉山常夜灯があり、建立は「明和七庚寅十二月吉日」(1770)と刻まれている。



富士神社の南を東西に走る道路を富士見通りという。旧笠井街道沿い(富士見通りの北側)に富士見屋という店があり、往復する人々はこの店に立ち寄り、酒や湯豆腐等をよく食べたという。



6 旧笠井街道道標

随応山十輪寺には十六羅漢が並ぶ。門前には、旧笠井街道の道標がある。正面の上部に仏像が刻まれているが、風化して何の仏像かははっきりしない。下に「口さゐみち 念仏講中」、右側面に「左 かさゐみち」と刻まれている。

隣に「御成婚記念」として大正13年建立の道標がある。「右 天王笠井道」「天王笠井道方面」「右 丸塚上新屋早出 左 上西神立浜松方面」と刻まれている。

もとは寺の南の旧笠井街道の角に建てられていたが、土地改良の時にここに移された。



十輪寺の裏にある八柱神社鳥居横にある秋葉山常夜灯（明和7年9月）には「右かさゐみち」と刻まれている。もと丸塚マート付近にあったという。

旧笠井街道は、丸塚町との境から右に折れ、赤宮神社の北側を北東へ向かって進み、天王町へ至る。以前は、田んぼの中の本道で、最も長いとも（天王田面）になっていた。

旧道はほとんど住宅地になり、東海染工付近まで消滅している。



7 赤宮神社

赤宮神社は、祭神が猿田彦命で、創建は貞観年間と伝えられる。往古西在所村、上之郷村の氏神であり、合併して上西村の氏神となった。

南北朝時代、長慶天皇は南朝三代、吉野で即位した。天皇は関東に渡り、その後信濃国に移ったが、北朝軍に攻められたため、清水家の先祖、清水屋六助の先導で天竜川を下り、遠江国宮口から徒歩でやっとこの神社

の地に着いた。そこで村人が小豆粥を作り勧めたところ、杓子でお食べになったことから、このお宮をオシャモジ様、オシャモッ様と呼ぶようになったという。今でも10月14・15日の祭の日には小豆粥が振る舞われ、無病息災を願っている。

上之郷の地名は、信州上郷御在所に、西在所の地名は東の仙洞御所に因んで付けられたという。

長昌寺は、清水家の子孫が南朝の志士や一門の菩提を弔うために建立したという。